

国々の欺き



英語版オリジナル 「The Deceptions of The Nations」

メッセージ by アミール・ツアルファティ

Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

本日のメッセージの題材は、私がかかなり長い間、避けようとしてきたものです。「国々の欺き」。敵の欺きについて話をしようとする、まず何か問題が起こると心構えしておかなければいけません。皆さんもご承知のように、メディアはたいがい敵の手中に入っています。私は「ミデヤン人」と呼んでますが、彼らはとても効果的に人々を洗脳することができます。聖書には、サタンの名前が「空中の權威を持つ君」であるとありますが、それは放送電波を使って、世界中に多くの偽りを送信し続けています。休むことなく。

おそらく、皆さんは、今日はイスラエルで行われる選挙の話をしなれないのかなと思っていらっしゃるでしょう。その話はしません。

・・・いいでしょう。

じゃあ一つだけ。

この国の政府や、ヨーロッパ諸国や、また、このために作られた、その他の非営利団体による数多くの不利な報道や、投票日の数日前に勝算は相手側にあると発表した、私に言わせれば偽の世論調査などの、あらゆる予想を覆して、ベンヤミン・ネタニヤフ氏は地滑り的とも言える勢いで当選を果たしました。

おそらく、皆さんもご存知だと思いますが、ネタニヤフ氏はアメリカを訪問していました。そのころはたぶん、イスラエルにいるよりも、選挙運動が上手くいっていたのではないのでしょうか。彼はここで、ある大きなスキーム、つまり策略を暴こうとしていたのです。世界各国が協力して成し遂げようとしているとんでもないことを、暴こうとしていました。それは、最終的に戦争を防ぐことにならないばかりか、それを加速しさえすることになる条約を受け入れることです。

アドルフ・ヒトラーが選挙に勝ってから5年後の1938年に、ウィンストン・チャーチルは、親友だったモラン卿にこう言いました。

「過去5年間にわたるドイツの問題について、私は深く懸念している。私たちの前には、恥辱と戦争という二つの選択肢があって、私たちは恥辱を選択しようとしており、それから、戦争が初めよりも、もっと不運な条件で我々の戸口に投げつけられるような気がする。」

何事かが、罪と偽りのうちに始まって、人々に真実が語られていないとき、そのことは長くは続きません。世界中の人々はマスコミによって洗脳されながらも、「いったいどうなっているんだろう。イスラエル人はもっと頭がいいだろうと思っていた。」「彼らは、あの右派で強硬派のネタニヤフを追い出すだろうと思っていた」と自問しています。

「彼らは、平和と安全が欲しくないのだろうか。」「希望と繁栄を望んでいないのだろうか。」「世界の仲間、世界の国々に受け入れられたいのではないのだろうか」と尋ねています。実際に、相手側のスローガンは「希望を持とう。変化をもたらそう。世界に受け入れられよう」というものでした。そうです。非常におもしろいと思いませんか。

アドルフ・ヒトラーは、私にとってはサタンの化身の代表ですが、そのアドルフ・ヒトラーが言ったことに、

「大きな嘘をついて、それを何度も繰り返せば、それは信じられるようになる」というものがあります。

彼はまたこうも言いました。

「嘘は大きく、単純にし、言い続ける。そうすれば大衆はいずれ信じる。」

彼は続けてこうも言いました。

「プロパガンダを上手く持続して使うことによって、民衆に天国さえも地獄のように思わせ、極度に惨めな生活をも楽園のように思わせることができる。」

そして彼は、

「大事なものは真実ではない。勝利だ」

とも言いました。

興味深いことに、これらのすべてを、この選挙期間中、私は自分の肌で、体で感じました。

イスラエルは、これまでになく繁栄しています。経済的にもうまく行っているし、防衛もそうです。これまでになく強くなっています。それなのに、彼らは「絶望的だ」、「私たちには希望がない」と思い込ませようとし、「私たちは安全ではない」、「私たちは変わらなければならない」、「私たちは受け入れられなければならない、ホワイトハウスにいる誰かさんが、私たちのことを不満に思っているから」と思い込ませようとしたのです。彼らは私たちに、本当にたくさんの嘘と欺きを売りつけました。そしてそのスローガンは「勝利2015!」だったのです。

「事実だろうと真実だろうと関係ない。勝つことのほうがもっと大事だ。国民が良い生活をしていても、人々の暮らしが10年前や15年前に比べてずっと良くなっても知ったことか。いや、我々は万事が酷い状態であるかのように見せかけ、天国を地獄であるかのように見せかけよう。」と。

サタンは欺瞞(ぎまん)の達人ですね。ところで、欺瞞者を欺瞞者たらしめるものとは何でしょう。欺瞞(ぎまん)とは、真実を知りながら、敢えて誰かにそれと正反対のことを伝えることです。もしも、あなたが真実を知らないで間違ったことを言ったなら、それはただの誤りです。しかし、あなたが真実を知っているが、しかも誰かにそれに反することを告げるなら、あなたは欺瞞者となるのです。ですから、サタンが大いなる欺瞞者であるということは、サタンは、何であれ自分が世に告げることが、真実ではないことを知っているということになります。

そして世の中には、二種類の欺瞞(ぎまん)があります。地球規模の欺き、世界全体に対する欺きがあり、私たちはそれを目にするということになりますし、実際、もう目にしています。グローバル経済、世界統一宗教、世界統一政府、これから出現する世界的指導者、これは世界全体に起こる欺きであり、ユダヤ人であれ、非ユダヤ人であれ、誰もが騙されるのです。ユダヤ人たちは彼がメシヤだと思ひ込み、非ユダヤ人たちは素晴らしいリーダーだと考え、誰もが彼に従うことになるのです。それは、世界全体に起こる欺きです。

でも、間違えてはいけません。もう一つ、しばしば見逃されがちな別種の欺瞞(ぎまん)があります。それは国々の欺きです。どういう意味かということ、それは非ユダヤ人、つまりイスラエル以外の国々の欺きです。

「えっ？それは聖書的なんですか？」って？

もちろんです。黙示録12章には、ミカエルとサタン自身の間起こった戦いについて書かれていますが、

**天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦した。
黙示録12:7**

**この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。
黙示録12:9**

とあります。黙示録12節はその話なのです。

さて、いかにサタンが天から落ちたのか、いかに神がサタンを地上にまで投げ落としたのか、私たちがサタンについて知らされる折、イザヤ書14章には、

暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。イザヤ書14:12

と書かれています。世界全体ではないのです。国々… 彼は国々を打ち破り（弱め）ます。一体、人はどうやって打ち破る（弱める）ことができるでしょう。偽り、欺瞞（ぎまん）を売りつけることによってです。

皆さんは、真実を知っている時には、次に何をしたらいいのか、うまく選択することができます。しかし、皆さんの意思決定の過程が欺瞞（ぎまん）に基づくものであり、皆さんがそれに気づいていないなら、皆さんは弱いのです。

サタンは国々を弱めています。方法は、彼は国家をその人民に敵対させるのです。いいですか。黙示録12章が世界全体の欺きについて語っているのに対し、黙示録20章はこう語っています。

**また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手を持って、天から下って来るのを見た。
黙示録20:1**

これは千年王国が始まる寸前のことです。それからこう書かれています。

彼は… 底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。黙示録20:3

この箇所を読み進めると、一千年の後にサタンはしばらくの間解き放されるのですが、サタンが最初にするのは、出て行って、再び諸国の民を惑わすこと。すごいですね。そればかりです。年中無休で諸国を欺きます。そして諸国というのは、イスラエルではありません。ヨハネは、イスラエルと諸国の両方について語る時は、全世界という言い方をします。そして、諸国について語る時は諸国という言い方をします。

新約聖書における諸国というギリシャ語はエスネで、エスノスが原形、エスネは「多くの国々」の意を表す複数形です。ヘブライ語では「ゴイ」が一つの国、「ゴイム」が複数形で国々。ヨエル書には、神がいかにしてすべての国民（ゴイム）を集めるかが語られており、マタイによる福音書25章では、イエスがすべての国々の民（エスネ）を集めます。この二つは全く同じです。

「国々」というのはイスラエルではありません。サタンが国々を惑わすときにイスラエルが含まれていないのは、イスラエルがその欺きの主題、対象となっているためです。つまり、その惑わしがイスラエルに関するものだからです。それを踏まえれば、マスコミが売りつけようとしていた嘘に、イスラエルがなぜ乗らなかったかがお分かりになるかもしれません。イスラエルには見えても、他の国の人たちには見えないものがあるのです。彼らが目隠しをされているからです。国々の間にあつて、多くのことをユダヤ人と同じように見ることができる人たちは、イエスを信じる人たちだけです。キリスト教徒とユダヤ人だけがはっきりを見抜き、どんな計画があるかを見抜くことができるのです。

誤解しないでください。イスラエルもまた目隠しをされています。しかし、それは違う種類の目隠しです。聖書には、神がイスラエルを盲目にすると書かれています。彼らに今日のこの日まで、見ることのできない目と聞くことのできない耳を与えたのは神なのです。それはなぜでしょう。それは、イスラエルにねたみを起こさせるため、彼らの不従順、つまりきを通して異邦人たちに救いが与えられるためです。もう驚くばかりです。すべて、ローマ人への手紙第11章に書かれています。

では、サタンが取り出して、国々を惑わすために使おうとしているイスラエルに関する偽りとは何でしょうか。

まず一つ目は、「イスラエル人は、神の民ではない」というものです。中には、「イスラエル人は、もはや神の民ではなくなった」という人たちもいます。「かつてはそうだったかもしれないが、もはやそうではない」と。

二つ目は、「その地の本当の名前はイスラエルではなく、パレスチナだ」というものです。この地上にいる人々のほとんどに尋ねると、「その通り」、と言われます。これは真っ赤な嘘なのですが、「実際、あなたがたの聖書の地図にも、イエスの時代にはイスラエルがパレスチナと呼ばれていたことが示されていますよ。」と言うのです。「聖書に書かれていますよ。」と。「そこにはアラブ人が最初に居たんだ。」と。これはあとで検証しましょう。

「占領が問題なんだ。」と言われます。これは私がどこに行っても耳にすることです。「占領がよくないんだ。」と誰もが口にします。「占領をやめろ。」と。

占領？

いったい何の？

「中東における和平は可能なのだ。」と言われます。彼らは、和平は達成可能であるという幻想を売りつけようとしています。彼らは、「二国家解決案が唯一の解決法であると認めないならば、我々はそれに乗っ取って動き、国連で二つの民族のための二つの国家に票を投じるぞ」と、ネタニヤフ首相に告げています。アメリカ政府は、24時間前に、このことを非常にはっきりとネタニヤフ首相に伝えたばかりです。私は皆さんのことをうらやましいとは思いません。

さて、イスラエル人が神の民ではないということについてはどうでしょうか。聖書には申命記14章2節に次のように書かれています。

あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。申命記14:2

どうやら、聖書にはそのように書かれています。どうやら、神はそうおっしゃっているようです。これでもまだ足りないなら、ゼカリヤ書2章8節をお読みしましょう。

主の栄光が、あなたがたを略奪した国々に私を遣わして後、万軍の主はこう仰せられる。『あなたがたに触れる者は、わたしの目の瞳に触れる者だ。』ゼカリヤ2:12(新共同訳)

神は、預言者を国々に遣わして警告を与えています。イスラエルに触れる者は、わたしの目の瞳に触れていると。

いいですか。私たちは弱い国です。こと、憎まれるということに関して言えば、憎まれたい人なんて誰もいません。誰もが受け入れてもらいたくて、生きているうちに10分限りでも名声と栄光を受けたいと思っています。イスラエルも、世界の家族の一員になりたいのです。そして、多くの人々は、どういうわけか、イスラエルが世界の一員になるためには、周りから言われていることすべてを受け入れる必要がある、と説得させられています。アウシュビッツを生き残った私の祖父母もそうですが、ユダヤ人たちは一般に、自分たちは本当に神に見捨てられたのだと考えました。だから、神が私たちの味方でないなら、アメリカを味方につけなければならない、ヨーロッパを味方につけなければならない、強い国々を味方につけなければならない、と考えたのです。

さて、

シオンは言った。『主は私を見捨てた。主は私を忘れた』と。イザヤ書49:14

すると神は言いました。

『女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。』イザヤ書49:15-16

神がそう言われたのです。皆さんは言いたいことを言っても構いません。しかし、これは神の言葉です。私は政治を説くためにここに立っているわけではありません。私たちは神の言葉を検証する為、ここに居るのです。

次はローマ人への手紙 11 章です。

もしも、皆さんが、「はい、はい。でもそれは旧約ですから。私たちはクリスチャンで、イエスを信じていますから。イエスはクリスチャンであってユダヤ教徒ではないから」とお考えだとしたら、神がユダヤ教徒でないことはご存知ですね。神はユダヤ教徒ではありません。でもイエスもクリスチャンではありません。ご存知でしたか？イエスは、決して新約聖書から説教したことはありません。ただの一度も。イエスはイエスの信者ではありません。クリスチャンがイエスの信者です。ですから、イエスはクリスチャンではありません。敢えて言うなら、イエスはユダヤ人としてこの世に來られました。ですが、私が言おうとしていることは、ローマ人への手紙 11 章で、異邦人のもとに送られたパウロが、神が異邦人のためになさっているすばらしいことを伝えていた際に、パウロは、彼らが「イスラエル人がもはや神の民ではなくなった」と考えるだろうとすぐに予測し、ローマ人への手紙 11 章 1 節でこう言っています。

すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。ローマ11:1

イスラエル人はある意味で神を退けてしまったから？

絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。ローマ11:1

もしも、神がご自分の民をお忘れになったのなら、神があなたをお忘れになることだってありえます。皆さんは、この聖句にしがみついていなければなりません。なぜなら、神がイスラエルになさった約束に誠実であられるなら、神は、確かに、皆さんになさった約束にも誠実であられるからです。神にそのご契約や御約束を破ることがおできになるとしたら、神は皆さんにも、そうされるかもしれないからです。そんな神は、私の神ではありません。

その地がパレスチナであって、イスラエルではない、ということについてはどうでしょう。お手持ちの聖書をご覧になって、地図のページに「キリスト時代のパレスチナ」とあるかどうか、確かめてみるといいでしょう。たいていの聖書にはそう記載されています。申し上げておきますが、歴史的に、それは真実ではありません。イエスの時代には、その地はパレスチナと呼ばれてはいませんでした。むしろ、マタイによる福音書 2 章 19 節から 21 節にこうあります。

ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが、夢でエジプトにいるヨセフに現れて、言った。『立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちをつけねらっていた人たちは死にました。』そこで、彼は立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に入った。
マタイ 2:19-21

これは非常に退屈な聖句です。考えてみてください。あまり大したことは書かれていません。「立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に行きなさい。」「分かりました。」そこで彼は立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に入りました。非常に単純な聖句ですが、ここに真実を見ることができません。その地はイスラエルと呼ばれていたのです。それが名前だったのです。もし皆さんのお気に触ったらすみません。ですが、それが名前なのです。旧約聖書だけでなく、確かに新約聖書においてもそうなのです。そしてずっと後に、主が、預言者を通して、イスラエルになさろうとしていること、ホロコーストの灰の中から彼らを復興させ、イスラエルの地に連れ戻す時のことについて語られた時、エゼキエルにこう言われました。

人の子よ。これらの骨はイスラエルの全家である。ああ、彼らは、『私たちの骨は干からび、望みは消えうせ、私たちは断ち切られる』と言っている。それゆえ、預言して彼らに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民よ。見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。エゼキエル37：11-12

二千年後に起こるユダヤ人の帰還について、エゼキエルはそう言いました。パレスチナとは言っていません。それは旧約聖書にもなければ、新約聖書にもありません。

では、一体全体、これはどこから来たのでしょうか。西暦135年にローマ皇帝ハドリアヌスが、ローマに対するユダヤ人の二度目の反乱を完全に制圧しようとした時、ユダヤ人とその故国との繋がりを記憶から抹消するために、ハドリアヌスはその属州の名をユダヤからシリア・パレスチナへと変更しました。そして非ユダヤ系文学では、その名称が一般的となりました。その名称は、実のところ、イスラエル人の古い敵であるペリシテ人に由来しています。ところで、ペリシテ人というのはアラブ人ではありませんでした。彼らはむしろ、ギリシャ諸島から来た人たちでした。そしてペリシテ人は、ヘブライ語ではプリシュティンと呼ばれました。PとLとSの三つの文字を見ると、ヘブライ語ではペイ、ラメド、シンド、それは侵略するという語の語幹となっています。侵略者。

あなたが自らをペリシテ人と名乗ったり、あなたの土地をペリシテに由来するパレスチナと呼ぶなら、あなたは実際に自分のことを何であると証言しているのでしょうか。あなたは侵略者であると言っているのです。

ところで、パレスチナという名前は世界中で非常に頻繁に使われたので、イスラエルの名前は忘れられてしまいました。それがまさに、敵の望むところなのです。

イスラエルの名が、もはや覚えられないようにしよう。

詩篇83:4

詩篇83章を読んでみてください。

なぜ私がそう言うかということ、大体においてパレスチナ人と呼ばれているのは、アラブ人ではなく、ユダヤ人です。こちらをご覧ください。これは1948年以前のエルサレム・ポスト紙です。それはパレスチナ・ポストという名称でした。画面左側を見てください。イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団は、パレスチナ管弦楽団という名前だったのです。ユダヤ人のオーケストラで、コンサートプログラムは全部ヘブライ語です。それに、第二次世界大戦でナチスドイツと戦うためにイギリス軍に加わったユダヤ人たちは、パレスチナ部隊と呼ばれました。ユダヤ人もいて、アラブ人もいて、そのころは皆がパレスチナ人と呼ばれていました。その部隊には三人のユダヤ人に対して一人の割合でアラブ人でした。ですから、どちらかということ、アラブ人よりもユダヤ人の方に自らをパレスチナ人と名乗る権利があるのです。では、なぜ彼らは自分たちのことをパレスチナ人と呼ばないのでしょうか。それがその土地の名前ではなく、その国の名前ではないからです。

「いいでしょう、でもね、最初に住んでいたのはアラブ人なんですよ。」

本当に？では教えてあげましょう。

まず最初に、ネヘミヤ記2章20節です。ネヘミヤはペルシャを去るところです。彼はその壁と神殿を建て直すためにイスラエルの地、エルサレムの町に向かっているところでした。そのための人材と資材を王から与えられていました。道中、彼は三人の人物に出くわします。アモン人と、モアブ人と、アラブ人です。アラブ人ゲシムと、アモン人トビヤ、それからモアブ人サヌバラテ。彼らはネヘミヤが王から与えられた物を伴って正々堂々と出て行くのを見ると、「ははーん、お前の心のうちは分かっている。あっちに行って王に反逆を起こそうとしているんだな」と考えました。ネヘミヤは彼らを見て言いました。反逆？私は持っている富をすべて投げ打って行くのだ。私は王の検酌官なのだ。私は成ろうと思えば何んでも成れる。私はすべてのものを後にして、私の属する場所に行こうとしているのだ。私は私の祖先の地に行くのだ。そしてネヘミヤは彼らに答えて言いました。

天の神ご自身が、私たちが成功させてくださる。だから、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。しかし、あなたがた（アラブ人、ホロン人、アモン人）には、エルサレムの中に何の分け前も、権利も、記念もないのだ。ネヘミヤ2:20

ネヘミヤは小さな男でした。考えてみてください。彼はアラブ人やその他のイスラエル周辺の諸国に対して「あなたがたには、エルサレムの中に何の分け前も、権利も、記念もない」と告げたのです。それはあなたたちのものではない、私たちのものだ。私は再建するために戻るのだ。すごいですね。

皆さんの中に、サミュエル・ラングホーン・クレメンズという人のことを聞いたことがある方はいらっしゃいますか。彼はマーク・トウェインとして知られていますが、おもしろい人です。マーク・トウェインは、1867年にイスラエルを訪れました。彼は、その時の印象を、自身の有名な旅行記『地中海遊覧記』の中で発表しましたが、イスラエルを、「樹木も生えておらず人間もない荒涼とした国」と描写しました。彼は、1867年にイスラエルの海岸を歩いたが、人っ子一人目にしなかった。「我々が先にいたんだ」という人たちがいますが、そこには誰もいなかったのです。彼はこう書いています。

「雑草が一面に生い茂っている荒れ果てた地方…沈黙の嘆きに満ちた広がり…道すがら、人の影はひとつも目にとまらない。…どこも、樹木や茂みはほとんど存在しなかった。荒地とすぐ親しくなるオリーブやサボテンさえ、この地をほとんど見捨てている。」

あらまあ。イスラエル旅行の宣伝にはマーク・トウェインは使わないほうがいいですね。でも考えてみてください。彼は人っ子一人として目にしなかった。誰もいなかったからです。

皆さんはジョーン・ピーターズという人のことをご存知でしょうか。ジョーンさんは2か月前に亡くなったばかりですが、素晴らしいアメリカ人女性で、生まれながらのユダヤ人でした。また非常にリベラルなジャーナリストでした。聞き覚えがありますか？ユダヤ人で、リベラルで、ジャーナリスト。全部揃っているのです。彼女は CBS ニュース・ドキュメンタリーのプロデューサーを務め、また、カーター政権の間、中東におけるアメリカ外交政策についてホワイト・ハウスのアドバイザーを務めた作家でもありました。カーター政権は、イスラエル・パレスチナ紛争について本を書かせ、パレスチナ側の動機を正当化するために、彼女に前払いで代金を支払いました。そして、彼らは彼女に指示しました。「行きなさい。ユダヤ人がパレスチナ人からその地を奪ったことは知っているでしょう。アラブ人が最初にそこにいたのを知っているでしょう。それを本にしなさい。ユダヤ人のあなたが書けば、ものすごく信憑性があるでしょう。」そこで彼女はその前払い金を受け取って、出かけて行きました。そして丹念に、執拗に調べ続け、ついに国連の保存記録に到達しました。そこで彼女は衝撃を受けました。

自分が目にし、発見していることが、周りの人たちが謳っていることと全く違うことに気づいた時、彼女は前払い金を返却して、こう言いました。「せっかくですが、お金はいただけません。私は自分で私自身の見解によって書かせていただきます。」

そして彼女は『ユダヤ人は有史以来』という題の本を書き、1984年に出版しました。これはクリスチャンにとって必読書です。

彼女によると、19世紀後半から20世紀初頭にヨーロッパから大量のユダヤ人移民がパレスチナに入ってくる前は、その地は大方において不毛で過疎でした。新しく到着したユダヤ人たちが大きな繁栄をもたらし、それが近隣に住む多くのアラブ人を惹きつけ、彼らはパレスチナに移動してきて、ユダヤ人の創造力と富の実に預かりました。

結果として、今日自らをパレスチナ人と名乗る人たちの多くは、これらの比較的最近に来た経済移民の子孫なのです。

いいですか。そうですねえ。アメリカとベネズエラをとりあげてみましょう。

うーん、そんな遠くにいく必要はありませんね。

では、アメリカとメキシコにしましょう。ティファナから国境を越えてサンディエゴに来る人たちがいま

す。違法か合法かは気にしないでください。彼らは仕事を見つけます。そして戦争が勃発します。すると彼らは自分たちは難民だと宣言します。どこの難民かと？「サンディエゴからの。」え、ちょっと待って。あなたたちは2年前に来たばかりでしょ。「でも、もう今は、サンディエゴ出身なんです。」

興味深いですね。ジョーン・ピーターズさんは、国連が、アラブ世界から圧力をかけられて、「難民」と断定するための基準を変えて、「はるか昔」から、たったの2年に減らしたことを発見したのです。パレスチナ人の計略に都合よく、彼らが難民と呼ばれるように。

彼女はまた、国連が世界中でも唯一パレスチナのためだけに設立した、国連難民救済事業機関が、レバノンの平均収入を超える多額のお金を支給していることも発見しました。

だから何十万人もの人たちが、そのお金をもらうためだけに、難民登録しているのです。すべてのことが数字上、誇張されているのです。事実的に正確ではありません。

皆さんはこうおっしゃるかもしれません。

「それはそうでしょう。彼女はユダヤ人なんだから。イスラエルに来て、影響を受けたんですよ。話にならない。それはユダヤ人のプロパガンダに決まってるじゃないですか。」

では、ズヘイル・モーセンの発言をご紹介します。彼は1971年から1979年にかけて、パレスチナ解放機構 (PLO) に属するシリア系組織アルサイカの議長を務めました。

1977年の3月に、オランダの新聞社トラウ (Trouw) からインタビューを受けた彼はこう言いました。「ヨルダン人、パレスチナ人、シリア人、レバノン人の中には違いがない。私たちは、みな一つの民族に属している。アラブ国だ。いいかい、私にはパレスチナの市民権、レバノンの市民権、ヨルダンの市民権、シリアの市民権を持つ家族親戚がいる。」

市民権があるということは、彼らがもともとそこの出身だということです。そして彼は言いました。

「我々是一个の民族なんだ。ただ政治的な理由によって、我々はパレスチナ人としてのアイデンティティを慎重に請け負うんだ。アラブ人が、パレスチナ人の存在を主張してシオニズムに拮抗するのは国家的利益なのだから。そうだと。パレスチナ人というアイデンティティが独自に存在するのは、ただ戦術上の理由にほかならない。パレスチナ国家の設立は、イスラエルに対抗し、アラブ統一のために戦い続けるための、新しい手立てなのだ。」

これは誰の発言ですか？パレスチナ人指導者のものです。

イスラエル人はなぜ二国家解決案を受け入れようとししないのか？

私たちイスラエル人は、その翌日に何が起こるか、ちゃんと分かっているからです。

するとこう言われます。

「うーん、占領が問題なんだ。あなたたちは入って来たけれど、彼らはそこにいたんだ。あなたたちは彼らの領地を占領したんだ。」

すみませんが、私たちはそんな風に突然現れたわけじゃありません。

1917年にバルフォア卿は、シオニスト会議の指導者であったライオネル・ロスチャイルド卿に宛てた書簡で

「親愛なるロスチャイルド卿、

私は、英国政府に代わり、以下のユダヤ人のシオニスト運動に共感する宣言が内閣に提案され、そして承認されたことを、喜びをもって貴殿に伝えます。英国政府は、ユダヤ人がパレスチナの地に国民的郷土を樹立することにつき好意をもって見ることとする。」

びっくりですね。1917年のことです。そして第一次世界大戦が終わって、1922年に、国際連盟は英国政府にパレスチナのための指令書という冊子を送りました。その指令書によると、英国政府は英国による直接統治の下でユダヤ人のための民族的郷土を含めることになっていたのです。言い換えれば、英国政府は、パレスチナをユダヤ人のための郷土として備えるように指示を受けていたのです。ですから私たちは、実際には、全世界が、これがイスラエルの地、イスラエルの民のための地であると認める中、合法

的に入って来たのです。

イスラエルは、1948年にアラブ5か国による攻撃を受けました。私たちはヨルダン川西岸地区も、ガザ地区も、ゴラン高原もシナイ半島も所有していませんでした。これらの問題となっている領土は、その当時はどれもイスラエルのものではありませんでした。それでも、イスラエルは攻撃されました。だから、問題は占領ではないのです。私たちの存在そのものが、問題なのです。

パレスチナ解放機構は1967年に設立されたものではありません。PLOは1964年に設立されました。私たちが、ヨルダン川西岸地区や、ガザ地区を所有するよりもずっと以前に。ですから、彼らは本当にヨルダン川西岸地区を解放したかったわけではないのです。彼らのロゴ、記章にある地図を見てください。そこに描かれているのは、イスラエル全土です。

そして何と言われているかというと、

「そこから立ち退いて彼らに生活させるってことはできないものか。そうすれば何もかもうまくいくのに。」

そうでしょうか。2005年にイスラエルはガザ地区からすべてのイスラエル人を撤退させました。それは心が引き裂かれるような辛いことでした。イスラエル兵たちは、ユダヤ人の家について住人を連れ出し、その家々を破壊せよと命じられました。彼らは住人達と一緒に泣きながら、そうしたのです。8500人の人たちが自分たちの家から追い出されました。それらの家は、彼らが政府の承認のもとに建てた家でした。私たちが、それと引き換えに受け取ったものは何でしょう。ガザにはもうユダヤ人はいません。ガザはもう占領されていません。それが問題だと言うなら、もう問題はないですね。私たちが引き換えに受け取ったのは、ロケットに、ミサイルに、迫撃砲に、テロ用トンネル。戦争です。平安は与えられませんでした。戦が増えたんです。

「中東和平は可能だ。」

そうでしょうか。ひとつお話ししましょう。今皆さんには秘密をお教えしますから、誰にも言わないでください。約束ですよ。

1900年代初めのアラブ・イスラム世界の指導者は、フサインという名で、イスラム教徒にとっての聖地すべて、メッカとマディーナの管理者の長、メッカのシャリーフとして知られていました。彼は1918年にメッカの日報、キブラに以下の内容を書きました。

「その国の資源ははまだ未開拓地であり、ユダヤ系移民によって開拓されるだろう。最も驚くべきことの一つだが、近年までパレスチナ人たちは祖国を離れ、高波を超えて四方八方にさまよっていたものだ。祖国の土は彼をつなぎとめることができなかった…

それと同時に、我々はユダヤ人たちが外国からパレスチナに流れ込んでくるのを見て来た。ロシアからも、ドイツからも、オーストリアからも、スペインからも、アメリカからも。深い洞察力を持つ者たちには、その要因を見逃すことはできなかった。彼らには、その国が元来の子孫たちのためのものであることが分かっていた。聖なる、愛する祖国。国外に追放されていた、これらの者たちの祖国への帰還は、同じ畑で彼らと一緒にいる兄弟たちにとって、田畑や工場、商業、その地に関するすべての分野で、物質的にも霊的にも、良い経験となるだろう。」彼は、実際に、ユダヤ人が戻って来るのは良いことなんだと言っているのです。これは、彼らの土地であって、それはそこに住むアラブ人の利益となるのだと。

一年後に彼の息子ファイサルが、初代イスラエル大統領となったユダヤ人指導者ハイム・ヴァイツマンと会い、彼らが和平協定を起草したことは不思議ではありません。

その和平協定の中にあり、そしてアラブが署名したのは、アラブ人がバルフォア宣言を認め、パレスチナにおける大規模なユダヤ系移民の移住を奨励するということでした。パレスチナにおける、宗教と礼拝の自由は基本原理として明記され、イスラム教の聖地はイスラムの管理下になることになっていました。シオニスト組織は、もう一つのアラブ国家の経済的可能性を探り、その資源を開発する手助けをすることを

約束しました。アラブ人はパレスチナはユダヤのものだと言ったが、あなたがたが私たちの未来の国の発展にも援助するという条件に限ってのみ、その協定に署名しよう。その国とはヨルダンとシリアとレバノンとイラクを含む予定でした。想像できますか？彼らはユダヤ人たちが戻ってくるのを許しただけでなく、奨励したのです。彼らはその協定に署名しました。ご覧ください。ハイム・ヴァイツマンの署名、そしてアラビア語でファイサルの署名。

でも、どうなったと思いますか。パリでファイサルは講和会議の前に立ち、パレスチナを除いたアラブ国家を要求しました。どうなったでしょう。その後、彼は民族主義者たちからの圧力を受けてそれを撤回しました。それで終わりです。

私たちは失ってしまったのです。

私たちは、もう少しでイスラエル全土がユダヤのものであるというアラブの承認を得るところでした。そして彼らの地は、ヨルダンとシリアになっていたはずで、今よりもずっといい状況になっていたはずで

ゴルダ・メリアはかつてこう言ったことがあります。

「私たちは、アラブ人が私たちの子どもたちを殺したことは許すことができます。でも私たちは、彼らが私たちに強制して、彼らの子どもたちを殺させたことは許せません。私たちは、アラブ人たちが、私たちに憎む以上に、自分たちの子どもたちを愛するようになって初めて、アラブ人と平和を保つことができます。」

深い言葉です。

考えてみれば、彼らには何度、独立国が提示されたでしょうか。

1937年にはピール委員会によって、

1939年にはイギリスの発表したマクドナルド白書で。

1947年の国連。

1979年のキャンプ・デービッド合意。1990年代のオスロ合意。

2000年にはエフード・バラクがパレスチナ国家を提示しました。

2008年にはエフード・オルメルトが国家を提示しました。

彼らは「否」と言い続けたのです。

私たちの外務大臣がこう言ったことがあります。

「パレスチナ人は、機会を逃す機会を決して逃さない。」

最も悲しいのは、ダニエル書9章27節によると、反キリストでさえも平和をつくり出すことができないということです。人々は平和を求めています。繁栄を望んでいます。ですが、反キリストも7年間の契約を結んで、3年半後にそれを破ってしまいます。世は、平和は達成しようと納得させようとします。向こう側に何かがあると思わせようとします。パレスチナ国家が、解決の道だと納得させようとします。彼らがまずそこにいたんだ、そこはパレスチナと呼ばれているんだ、と。世は、あなたに何でも信じ込ませようとします。でも真実は、平和の君が戻られるまで、中東に平和はありえないのです。

それでは結論です。

イスラエルを支援することは、政治的立場ではなく、聖書的立場です。そして、国々の欺きは教会の教理に潜り込み始めています。ご存知でしたか。

私もラジオで聞いたばかりですが、ある巨大教会の牧師が創世記12章3節

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。創世記12:3

これは、イスラエルのことではないと言ったということです。わたしは椅子から転げ落ちそうになりました。信じられませんでした。大いに親イスラエルであるべきなのに。そう、欺きは教理の中に潜り混みます。

1960年に亡くなった、大変学識の深い神学者で、牧師でもあったドナルド・バーンハウスはこう記

しました。

「ギリシャがパレスチナを制圧して（バーンハウスがパレスチナと呼んだのは、彼の時代にはまだイスラエルではなかったからです）ユダヤ神殿の祭壇を汚すと、彼らはその後まもなくローマに征服された。

ローマがパウロをはじめ多くの者を殺し、ティトゥスのもとにエルサレムを破壊すると、まもなくローマも倒れた。

スペインはユダヤ人に対する宗教裁判の後、三流国家に転落した。

ポーランドは大虐殺の後に倒れ、ヒトラーのドイツは反ユダヤ主義の盛り上がりその後で敗れ、イギリスはイスラエルを裏切って帝国を失った。」

これ全部です。次から次へ。このリストにもっと他の国々が続くのを見たいですか。誰も見たい人は居ないでしょう。

みんな聞こうとしないし、学ぼうともしない。欺きは今も続いています。

それでも、私はとにかく ハレルヤ！と言います。

ユダヤ人を抹消しようとする試みがあっても、この地の面からユダヤ人を消し去ろうという試みがあっても、神はそこに居られ、そのご計画を成就されるからです。

敵の計った悪を、神は必ず良いことのために用いることができます。

イスラエルという国は、ホロコーストの灰の中から生まれました。ホロコーストがあったために、世界中の人たちがイスラエルはユダヤ人のための地であると納得し、国連でそう投票したのです。

そして最後に一つ、大事なことを申し上げます。今日私が皆さんにどうしても理解していただきたいのは、神はイスラエルに敵対する国々を裁かれるということです。神が彼らを裁かれるのは、彼らがイスラエルに敵対したからです。これは未来に限られたことではありません。過去においても、エゼキエル書25章に書かれています。

次のような主のことばが私にあった。『人の子よ。顔をアモン人に向け、彼らに預言せよ。あなたはアモン人に言え。神である主のことばを聞け。神である主はこう仰せられる。わたしの聖所が汚されたとき、イスラエルの地が荒れ果てたとき、ユダの家が捕囚となって行ったとき、あなたは、あはは、と言ってあざけた。それゆえ、わたしは、あなたを東の人々に渡して、彼らの所有とする。彼らはあなたのうちに宿営を張り、…』エゼキエル25:3-4

神は罰を下されます。神は、過去にイスラエルの惨状や裁きに歓喜した者たちには誰にでも罰を下されました。神はこれから先も罰を下されます。ヨエル書第3章で、聖書は神がすべての国民を集め、彼らをヨシヤパテの谷に連れ下り、その所で、ある一つのことに準じて彼らを裁くと言っています。あなたはわたしの民に何をしたのか。あなたはわたしの地に何をしたのか。だからオリーブ山はユダヤ人の墓でいっぱいなのです。そこに埋葬されたユダヤ人たちは皆、復活して神がすべての国民に裁きを下されるときにそれを目撃したいと望んでいます。マタイによる福音書25章でイエスは言われます。

そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼（人の子）は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け… マタイ25:32

彼が羊と山羊とを分けるその基準は何でしょうか。それらの人々は皆、非ユダヤ人です。永遠の命をイエスとともにする人たちと、そうでない人たちがいます。その基準はこれです。

「あなたはわたしの兄弟たちに何をしたのか、わたしの兄弟たちの最も小さい者たちのひとりに。」

患難の間中、非ユダヤ人たちはその信仰によってではなく、行いによって試されることとなります。ヤコブの手紙2章14節にあるように、行いが伴わない信仰は、本物の信仰ではないからです。行いによって救われるわけではありませんが、クリスチャンだと自称しながら神の民の首をはねるようなことはできません。

今、世界では非常に多くの勇敢なクリスチャンが首をはねられています。それでも彼らは信仰を撤回せず、イエスを否定しません。そして彼らは行くところまで行くのです。中東では特に。

そこで私は皆さんにお尋ねします。
あなたは羊ですか。それとも山羊ですか。

ここに座っておられるのなら、おそらく心配する必要はないでしょう。
皆と共に携挙に預かって、患難時代を逃れるのですから。

しかし、何であれ、皆さんが家族親戚に教えることは、彼らが羊となるか山羊となるかに影響してくるのです。というのは、もしも皆さんが携挙されても、彼らには準備ができていなくて、ここに取り残され、患難を経験することになったら、彼らはある日あなたの言ったことを思い出すかもしれないからです。そしてもしかすると、その時、世界中に多くのコリー・テン・ブームが現れるかもしれないのです。これらの人たちが、神の王国に入る羊たちなのです。これらの日の後に。ですから私の祈りは、私たち全員が敵の策略を理解し、クリスチャンとして、真理のために立ち上がるという義務を理解することです。たとえそれがあまり人気のないことでも、政治的に偏り過ぎているように聞こえても。私たちは政治の話をしているわけではありません。これは神のみことばです。政治家たちは神のみことばを見当違いで無関係なものにしようとします。ですが、見当違いなのは彼らのほうです。
私は、神のみことばの方をはるかに信頼します。

祈りましょう・・・